2018 年 10 月の園だより

学校法人ピアソン学園　北見幼稚園
Tel. & Fax.　23-5353
幼稚園のホームページ：http://www.kitami-kindergarten.ed.jp/
幼稚園のメールアドレス：kitamiyouchien@car.ocn.ne.jp

今 月 の 聖 句

わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。
コリントの信徒への手紙Ⅰ　３章６節

<聖書に聞く>

使徒パウロがコリントを訪ねたのは、紀元 50 年頃でした。ローマ帝国の支配下で政治・経済の中心地として栄えていたコリント。そこには大金持ちもいれば極貧の者もいました。道徳的に大変乱れた土地柄だったと言います。パウロはそこに１年半滞在して、教会を建てました。その後いまのトルコやシリア、エルサレムなどを歴訪する旅を続けます。あるときパウロは、自分が苦労して建てたコリント教会の中に分裂が起こり、対立があることを耳にします。ある人々は「わたしはパウロにつく」と言い、他の人はパウロの後にコリント教会を指導した有能な説教者アポロにつくなどと言っていたのです。そこで彼はコリント教会に宛てて手紙を書きました。それが『コリントの信徒への手紙』です。この中で、パウロは訴えます。「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。 わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」パウロの何回かの手紙によってこの教会は本来の姿を取り戻したようです。今月の聖句は、コリント教会に宛てられたものですが、しかし、この言葉はいま子育て真っ最中の私たちにも語りかけられているように思います。一人ひとりの子ども達の成長を支えるものとして、家庭には保護者がいて、あるいは祖父母がいて、幼稚園では担任のほかさまざまな職員がいて、それらが様々な役割を持って関わっています。どの人もその子の成長を目に留め喜ぶことができる、私が何かしたからということを越えて神様が成長させてくださっていることを知るのです。私の友人だったある園長は、「子育ては祈りだ。」とよく言っていました。その言葉通りの聖句だと思います。

<月主題>　「取り組む」

<月のねらい>

年少；・豊かな秋の実りを喜び、神様に感謝する。
　　・気づいた事をもっとよく知ろうとかんがえたり、関わったりする。
年中；・豊かな秋の実りをを喜び、神様に感謝する。
　　・遊びに熱中し、繰り返し取り組むことが楽しくなる。
年長；・豊かな秋の実りをを喜び、神様に感謝する。
　　・気づいた事をもっとよく知ろうとかんがえたり、関わったりする。

<10 月の子どもたち>

園庭のモミジや桜やイチョウの葉が、赤や黄色に染まり、季節が目に見えて移って行きます。子どもたちは、弾むように園庭を駆け回りながら、鬼ごっこやサッカーなどルールのある遊びを楽しみます。泥んこ遊びや、砂場遊びもまだまだ盛んです。リンゴ狩り、ぶどう狩りは、この月ならではの楽しみです。散歩に行った公園で拾ってきた葉っぱや木の実や枝や石ころなどの自然物が、子ども達の想像力を刺激して、色々な遊びや製作につながっていきます。メニューを相談しながら、自分たちで調理するクッキング活動をするクラスもあります。老人ホーム訪問では、入所している方々に歌や踊りを披露したり、いっしょに遊んだりして交流します。中旬には、食べ物が与えられていることを感謝する礼拝（収穫感謝祭）をします。大きな鍋に子ども達の刻んだ野菜を入れて、シチューを作って皆でおいしく頂きます。プロジェクト活動もそれぞれのクラスのテーマに沿って動いていきます。月末には、参観日も行われます。

<絵本の楽しみ>　「おまたせクッキー」　ハッチンス　作、乾　侑美子　訳

お母さんがクッキーを焼きました。「2 人で分けて、おやつにしてね。」お腹がペコペコだったビクトリアとサムは大喜び。2 人で分けると６つずつでした。お皿に分けようとしたその時、ピンポーン！チャイムが鳴りました。隣のトムとハナでした。ちょうどよかった、一緒に食べようということになり、４人で３つずつ。それをお皿に乗せようとするとまたピンポーン。今度はピーター兄弟でした。ちょうどよかった、とクッキーを数えるとみんな２つずつありました。いよいよ食べられるかと思ったその時、またまたピンポーン！チャイムが鳴るたびに子ども達の数が増えて、みんな一つずつで落ち着くかと思ったときに、ピンポーン！お母さんがドアを開ける前に食べたらと提案しますが、この家のサムは本当にいい子です。「ちょっと待って。」と言ってドアを開けました。すると…。分け合う喜びや数の面白さだけでなく足跡やネコの脇役も楽しいです。

<こころの空>

年長の子ども達が水を洗ったらしいと聞いて、取材しました。K「どうして水を洗おうと考えたの？」、C1「色が変わるかもしれないと思ったの。」、C2「砂を洗ってみたら水が真っ白になった。」、K「それで今度は水だけを洗ったの？」（バケツに水を入れてかき回したらしい。）、C1「今度は水だけで洗ったら色が変わるかもしれないと思った。」、K「こっちの入れ物で洗ったらオレンジになったの？」、C1「洗ったらオレンジになった。」K「写真ではオレンジ色になってないけど。」、C2「写真だからだ。」、（水をすくうようにして）C1「手をこうやったらオレンジ色になった。」K「どうしてオレンジ色になるんだろう。」、C2：「あっ、手がオレンジ色だからだ。」、C1「手の赤いところに載せたら赤くなる。」、K「その水をバケツに戻したらどうなる？」、C2「ただの水になる。」吹き出しそうになりながら、子ども達の面白い理論に付き合いました。ある研修で、「子ども達は正しい知識を求められると、記憶しようとして考えることを止める。高度な思考力を持つ子どもを育てるには、子どもの脳を活発化させる質問をすべきです。記憶は高度な思考ではありません。」と聞きました。「よく知っている子ども」から「よく考える子ども」へ、教育が大きく変わっていく時を迎えています。

<絵本の楽しみ>　「おまたせクッキー」　ハッチンス　作、乾　侑美子　訳

息子や娘と手をつないで歩いた時の記憶はもうはっきりしません。でも、お母さんに手を引かれて歩くこの男の子の姿を見ると、「わかる！」とか、「だよね！」などと言ってしまいそうになります。子どもって本当にこうなんです。歩いている途中にあるもの一つ一つが気になり、面白そうに思えて動こうとしなくなります。「待って！」。大人が急いでいるときに限って「待って！」が増えて行きます。 大人はますます子どもを急かし、子どもはますます待ってと言いの悪循環になってしまいます。この絵本のお母さんもかなり急いでいます。お母さんのセリフは、「遅れそう！」、「急がないと！」、「行くわよ！」、「待てないの！」

と、男の子にとっては最悪なものばかりです。でも、一向にめげることのない男の子。途中から降ってきた雨が止んで、お母さんが初めてちょっと立ち止まって二人が見たのは…。

お母さんがクッキーを焼きました。「2人で分けて、おやつにしてね。」お腹がペコペコだったビクトリアとサムは大喜び。2人で分けると6つずつでした。お皿に分けようとしたその時、ピンポーン！チャイムが鳴りました。隣のトムとハナでした。ちょうどよかった、一緒に食べようということになり、4人で3つずつ。それをお皿に乗せようとするとまたピンポーン。今度はピーター兄弟でした。ちょうどよかった、とクッキーを数えるとみんな2つずつありました。いよいよ食べられるかと思ったその時、またまたピンポーン！チャイムが鳴るたびに子ども達の数が増えて、みんな一つずつで落ち着くかと思ったときに、ピンポーン！お母さんがドアを開ける前に食べたらと提案しますが、この家のサムは本当にいい子です。「ちょっと待って。」と言ってドアを開けました。すると…。数を楽しむだけでなく、「分けあうこと」、「行動を選ぶこと」など、色々体験させてくれます。足跡やネコ、お皿の脇役の仕掛けも楽しいです。

また今度は女医とサーモンといとこ達がぞろぞろと6人も。みんなにクッキー当たるのかなと、心配になります。数えてみるとちょうどみんな一つずつ。あーよかったと思っていたら、またまたピンポーン！えーっ、もう無理と思った時、お母さんがドアを開ける前に食べちゃったらと提案しますが、この家のサムは本当にいい子です。ちょっと待って、と言ってドアを開けます。するとおばあちゃんが大きなお皿いっぱいにクッキーを焼いて持って来てくれていたのでした。

使徒パウロがコリントを訪ねたのは、紀元50年頃でした。ギリシアの町々でイエスさまの福音を伝えようとして頑張りましたが受け入れてもらえず、コリントに移動して来たのです。ローマ帝国の支配下で政治・経済の中心地として栄えていたコリント。そこには大金持ちもいれば極貧の者もいました。道徳的にも大変乱れた土地柄だったと言います。パウロはそこに1年半滞在して、教会を建てたのでした。その後いまのトルコやシリア、エルサレムなどを歴訪する旅を続けます。あるときパウロは、自分が苦労して建てたコリントの教会の中に分裂が起こり、対立があることを耳にします。ある人々は「わたしはパウロにつく」と言い、他の人は「わたしはアポロににつく」などと言っていたのです。アポロはパウロの後にコリント教会を指導した有能な説教者だったそうです。そこで彼はコリントの教会に宛てて手紙を書きました。それが『コリントの信徒への手紙』と呼ばれているものです。この中で、パウロは切々と訴えます。「アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。 わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」パウロの何回かの手紙によってこの教会は本来の姿を取り戻したようです。今月の聖句は、コリント教会に宛てられたものですが、しかし、この言葉はいま子育て真っ最中の私たちにも語りかけられているように思います。一人ひとりの子ども達の成長を支えるものとして、家庭には保護者がいて、あるいは祖父母がいて、幼稚園では担任のほかさまざまな職員がいて、それらが様々な役割を持って関わっています。どの人もその子の成長を目に留め喜ぶことができる、私が何かしたからということを越えて神様が成長させてくださっていることを知るのです。私の友人だったある園長は、「子育ては祈りだ。」とよく言っていました。その言葉通りの聖句だと思います。

植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることになります。わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

のあたり、にキリストの福音を伝えるために伝道旅行をネットで調べてみると、メソポタミア地方で一族と共に暮らしていたアブラム（後に神様からアブラハムと命名される）に、ある時神様が言われました。「あなたは生まれた故郷　父の家を離れて　私が示す地に行きなさい。私はあなたを大いなる国民にし　あなたを祝福し、あなたの名を高める。」と。今風に考えれば働き盛りの中年世代でしょうか。その場所で生きていけばなんの問題もない、どこに行くかわからないような旅立ちをする必要はアブラハムにはありません。しかし、アブラハムは、「主の言葉に従って旅立った」のです。故郷から現在

のパレスチナそしてエジプトにまで旅するアブラハムの人生は冒険に満ちた人生でした。危険を冒してまで旅するアブラハムを動かしたものは、ただ、私の示す地に行きなさいという神様の約束だけでした。大いなる国民にすると約束されたアブラハムに与えられたのは、一人息子イサクだけです。それでも神様の言葉を信じて旅をするアブラハム。神様の約束が果たされたのはなん世代も先のことでした。私ごとですが、27 年前に住んでいた東京の郊外の家を離れて、妻と２人の子どもを連れて北見に引っ越して来ました。神様の声が聞こえた訳ではありませんでしたが、家族にはそれぞれ仲が良かった友達との別れを体験させてしまったことを今も時々思います。ただ、北見での生活は、次々とたくさんの課題が押し寄せてきたにもかかわらず、それを越える色々な人々との出会いによって大変豊かなものに変えられて行きました。ささやかな私の旅を、神様が支えてくださったと思わざるを得ません。私たちの人生はそれぞれに冒険です。その旅の同伴者として神様が共に歩んでくださることを、アブラハムの物語は私達に語っているように思います。

　最近の北見幼稚園の運動会は、何か園長の仮装大会の様相を呈しているのではないかと、本人は言うのですが、担任達は「いや、伝統ですから。」と請け合ってくれません。困ったものです。今年も変なやり取りをしてしまい、赤鬼なのに青くなったりしました。さて、運動会のリレーにはいつも感動がありますが、今年のリレーは特別でした。練習のはじめ頃は偶数だったので、子ども達が希望するチームに分けて、練習を始めましたが、途中から人数が増えて、１チームだけ２回走る子を決めて練習をし当日を迎えました。リレーは、はじめからデッドヒートでした。コースは、インコース最短で走って約１０２メートルです。幼児にとってはかなり長い距離です。でもその距離なので、様々なドラマが生まれ感動が生まれます。この日も、離されては抜き返すことが何回かあって、アンカーにバトンが渡りました。少し距離がありました。その日２回目を走るＨちゃんはものすごい迫力でした。第３コーナーでかなり近づき、ゴールした時はほぼ同時でした。競馬ではありません。写真判定もありません。担任が、「今の勝負は同時に着いたので引き分けです。」そ

T「どうして水を洗おうと考えたの？」、C1「色が変わるかもしれないと思ったの。」、C2「砂を洗ってみたら水が真っ白になった。」、T「１回だけ洗ったの？」、C1「５回洗った。水白くなった。」、T「それで今度は水だけを洗ったの？」（バケツに水を入れてただかき回したらしい。）、C1「今度は水だけで洗ったら色が変わるかもしれないと思った。」、T「こっちの入れ物で洗ったらオレンジになったの？」、C1「洗ったらオレンジになった。」T「写真ではオレンジ色になってないけど。」、C2「写真だからだ。」、（水を両手ですくうようにして）C1「手をこうやったらオレンジ色になった。」T「手をこうやったらオレンジになるの？」、C1「今度やってみな。」、T「どうしてオレンジ色になるんだろう。」、C2：「あっ、手がオレンジ色だからだ。」、C1「手の赤いところに載せたら赤くなる。」、T「その水をバケツに戻したらどうなる？」、C2「ただの水になる。」

年長の子ども達が水を洗ったらしいと聞いて、取材して見ました。T「どうして水を洗おうと考えたの？」、C1「色が変わるかもしれないと思ったの。」、C2「砂を洗ってみたら水が真っ白になった。」、T「それで今度は水だけを洗ったの？」（バケツに水を入れてただかき回したらしい。）、C1「今度は水だけで洗ったら色が変わるかもしれないと思った。」、T「こっちの入れ物で洗ったらオレンジになったの？」、C1「洗ったらオレンジになった。」T「写真ではオレンジ色になってないけど。」、C2「写真だからだ。」、（水を両手ですくうようにして）C1「手をこうやったらオレンジ色になった。」T「どうしてオレンジ色になるんだろう。」、C2：「あっ、手がオレンジ色だからだ。」、C1「手の赤いところに載せたら赤くなる。」、T「その水をバケツに戻したらどうなる？」、C2「ただの水になる。」吹き出しそうになりながら、子ども達の面白い理論に付き合いました。ある研修で、「子ども達は正しい知識を求められると、記憶しようとして考えることを止める。高度な思考力を持つ子どもに育てるために大人は子どもの脳を活発化させるための質問をすべきである。記憶は高度な思考ではない。」と聞きました。